

侍従とパイプ

入江相政



中公文庫 ©1979

侍従とパイプ

昭和五十四年一月十日初版
昭和五十四年四月五日再版

著 者 入 江 相 政

発行者 高 梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

侍従とパイプ

入江 相政著



中央公論社

目次

お上とお風呂	9
お上のお弁当を食べた話	14
お上を蹴った話	18
皇后さまと絵	20
名も知らぬ花	22
お濠の内外	28
羊蹄のいただき	31
皇居このごろ	39
不思議な調和	42
桶狭間	45

終戦前夜記

47

侍従とパイプ

58

その後の侍従とパイプ

64

石垣

67

湯浅倉平

71

鈴木貫太郎

87

斎藤茂吉

95

歌会始

100

敬語法の手前のもの

105

いははしる

110

紫式部がもし見たら

117

あどせろとかも

126

流されて

ストレイト

壕舎記

中間搾取

にらみ鯛

続にらみ鯛

尾花沢の恋

最後の歌舞伎役者

違和

修身科の問題

ひとりの人

わが家の味噌汁

130

134

140

151

155

158

163

165

171

174

178

180

椎茸酒

子孫のために……

学習院生活

学習院氣質

めっちゃくちゃあるき

初刊序

文庫版あとがき

208 206 203 197 189 186 181

侍従とパイプ

お上^{かみ}とお風呂

いったい御旅行の時に、陛下が宿屋にお泊りになるということは、戦前にはなかったことである。まだ皇孫のころ、したがってごくお小さいころ、修善寺の菊屋にお泊りになったのが、たった一つの例外というのだから。

戦後の地方巡幸の際も、二十一年の、静岡、岐阜、愛知、茨城といずれも県庁、学校などの公共の建物。千葉の時は、銚子の新生^{あきお}という貨物の駅の引込線に、お召列車を引き入れて、それにお泊りになった。私も全然動かない汽車に寝たのは、この時がはじめてだし、今後もうこういことはまずないだろう。

二十二年になって、大阪、和歌山、兵庫にいらっしゃったが、これも、県庁と学校。その夏東北六県をおまわりになった時に、はじめて旅館にお泊りになった。上ノ山の村尾旅館と、飯坂の花水館である。この時陛下は「宿屋というものは、やっぱり人の泊るのに工合よくできているものだ」と感嘆していらっしゃった。

それはそのはずで、学校の教室に寝たり、公会堂の出演者控室に泊ったりすることは、かま

ひげを剃ったり、安全カミソリで松の木の手入れをするのと同様なのだから。

その同じ二十二年の晩秋のころ、福井、石川、富山三県下をおまわりになった。福井、石川両県下では、芦原とか、山中とか、いい温泉場にお泊りになったが、富山市は戦災もひどく、適当なお泊り場所もなかったのだろう、お宿は県庁ということになった。

富山県庁は三階建ての本建築で、この建物は戦災も全くなりっぱなものであった。ここの貴賓室にお泊りになることになった。隣に、風呂場、洗面所にもなるような空き間が一つあるけれど、風呂桶もないし、洗面器もない。

知事は館哲二さんで、ここには三晩お泊り願うことでもあるし、お風呂を何とかしようということだったが、陛下が地方をおまわりになるのは、戦後の復興を御祈念になって、一人でも多くの人に会い、慰めたり、はげましたりしてきたい、そのためには自分はどんな不自由もしのぶから、とおっしゃっているのだから、こういうところに、わざわざ風呂の設備をすることは、陛下のお好みにならないことである、と話したら、よくその主旨を了解して下さった。

だから富山県下では、風呂にはおはいりになれない、と申し上げてあった。福井、石川と一週間がかりでおまわりになって、いよいよ富山県庁にお着きになった。「ここは風呂はなかったんだね」とおっしゃったから「ございません」とお答えした。

陛下はお風呂はお好きなほうではなく、東京などではそう頻繁にはおはいりにならないのだが、御旅行さきでは、朝から晩まで、方々おまわりになってお疲れになるためか、あるいはせっかく

準備してあるのだから、とお考えになるのか、たいてい毎日おはいりになる。

陛下はこのようにしてお風呂なし、ということになったが、われわれにはいい風呂が待っていてくれた。

県庁というようなところは、昼間は大勢の人がいるが、夜は宿直の小使さんぐらいだから、よくお供のわれわれは、小使部屋の据風呂にはいりに行くことになるのだが、こみあっていてなかなかはいれないから、だいたい、県庁、学校などの時には、われわれもほとんどはいらなかった。したがってこの富山県庁もあきらめていたのに、地下に風呂があるとは耳よりだ。

行ってみると、地下室にきれいな風呂ができている。県庁員の厚生施設として、風呂がほしいところだったから、この機会に新設したということだった。われわれも実に楽しくこの風呂にはいった。

当時の大金侍従長もこれにはいって、あすは陛下にもおはいり願おうじゃあないかといわれた。それでそのことを申し上げたら、じゃあはいろいろとおっしゃり、翌日は夕方お帰りになってから、まず陛下がおはいりになり、つづいてわれわれお供のものやら、県庁の人もみんなはいった。

つくづく、貴賓室の隣に陛下専用の風呂場を造ってもらわなくてよかったと思った。

こんどは二十五年の春の、四国の西のほうでの話である。そこは一晚お泊りになるだけであったが、陛下はすこしおかげ気味で、その日は風呂をおやめになった。侍従や侍医の風呂は一般人

のはいる大きいのがあったのだが、陛下がおはいりにならないことになったから、風呂がひとつ無駄になってしまったわけだし、別の風呂はどうせ外の人たちでいっぱいだろうし、こっちのほうも、きれいで気持がいいだろうというのでまず侍従二人で、陛下のために用意した風呂にはいつてしまった。

そしたら窓から婆さんが一人のぞいて、怒ったような顔をしていたが、なんのことかわからず出てきてしまい、そのあといれかわりに、侍医が二人その風呂にはいつた。そして二人が湯ぶねにはいつて湯にひたるやいなや、湯は見る見る減って来て、またたく間に全くなくなってしまった。湯の全くない湯ぶねのなかに、大の男が二人しゃがんでゐるほど、バカげた図はない。第一、図があるものもない、全然意味がないのだからやむを得ず出て来てしまった。まだろくにあたたまらないうちのことだから、ブルブルふるなえがら出て来たのである。四月といつてもこの年は妙に寒い年でもあったし、そしてこのために侍医のひとりとは、とうとうかぜを引いてしまった。

どうしてこういうことになったか。あとからそしてほかから聞えて来たところによると、この風呂は陛下だけにはいつていただき——侍従とか侍医とか、そういう人たちにははいらせないで——、そして陛下がここをお発ちになったら、またわかし直して土地の有力者がはいろう、ということになっており、はいろ順序までも、いろいろやかましい論議の末にきめられていたのだそう。ところが全くはからずも、とんだ障害がおこって、陛下はおかぜのためにおはいりにならず、あまつさえ、侍従とか侍医とかいうけがれ多き人々がはいつたのだから怒ったのだそう。

さきに記した、のぞきに來た婆さんはどういふ人物であつたかわからない。それにまたもうひとつ不思議なことは、この風呂の仕掛である。つまり風呂場の外で操作すると湯が抜けてしまうということ。こんな風呂がほかにあるだろうか、そしてまた何のために骨を折ってこんな仕掛をこしらえたものであろうか。

このようにして侍従や侍医の心なき入浴のために、地もとの人たちの苦心經營したことは土崩瓦解してしまつたのである。

しかしこの時の侍従や侍医たちのやつたことは、決してまちがつてはいないと思う。そして私はこの時はお供していなかったのだから、これはあながち自己弁護というわけでもない。

(昭和三十二年)

お上のお弁当を食べた話

昭和二十二年の大阪、和歌山、兵庫巡幸の時のことである。六月六日、京都の大宮御所をお発ちになって、吹田操車場をへて大阪市内の大阪製作所、授産所、引揚援護館をおまわりになって、市役所で昼の弁当を召しあがることになった。われわれお供のものは別室で食べることになっていて、私がそこへ行って見ると、なんとその日の弁当は、一尺四方ぐらゐの春慶塗の弁当箱といふよりは蓋つきの膳ぜんのようなものに、実にきれいに御馳走がつまっている。酒の肴さかなのような前菜ふりのものがあつたりして、ことに二十二年のことで東京では食うや食わずでいたころのことだから、一見してじつとしていられないようなものである。

当時の大金侍従長も蓋をとって見て、「これをお上に上げよう」という。——そのころまでは、お上には大膳のものが差し上げなかった。どこへ御旅行になつても、召しあがるものは大膳のものであり、どこでお弁当を召しあがってもそれは決して地元の料理人のつくつたものではなかった。——京都から持ってきた大膳製のお弁当を召しあがらないうちと思つて、大いそぎでその弁当の箱を持って御座所に出た。そしたらちやうどこれからお弁当をお開きになろうという

ころだった。

そこへ私が春慶塗の大きな箱を持ちこんだものだから、何事がおこったかというような顔をしていらっしやった。「府のほうでわれわれのために用意してくれた弁当がたいへんきれいで、おいしそうでございますから、差し上げたらどうだろう、ということになりました」といって蓋をとって御覧に入れたら、陛下も地元のものを召しあがるのは、はじめてのことでもあるし、急に食欲をおもよおしになったと見えて、「しかしこれをわたしが食べると、だれか足りなくなりやしないか？」とおっしゃり終ったころには、お箸のさき^{はし}がもう鮎にとどいていた。

私は「いいえ、あちらにはまだたくさんございましたから、大丈夫でございます」とおひきうけた。今考えて見ればこれはきわめていい加減な話で、その部屋の人数と弁当の数とをつき合わせて見たわけでもないし、また大阪府庁が、必要にたくさん弁当を準備するはずもないのである。これは春慶塗の弁当箱が高く積み上げてあった印象のすばらしさから、こう申し上げてしまったのに過ぎない。それに、これくらい気合をかけなければ、陛下は御遠慮になって召しあがらなくなってしまうかもしれないし、さらにそれと矛盾するようではあるが、お箸はすでに鮎に届いていたようではあったし。

喜んで召しあがりはじめたのを見とどけて、もとの部屋にもどって見ると、もうみんなその弁当を喜んで食べはじめている。私がさっきちょっと坐っていた所には、大阪の知らない人が坐って盛んに食べている。どこかに弁当だけ置いてあって人のいないところはないかと思つて方々さ